

プレシアは悩んでいた。

いや、悩んでいたというよりも困っていた、というべきだろうか。

いま自分の目の前に立ってこちらを見上げてくる少女、リンディと名乗ったその少女の期待に満ちた眼差しに、プレシアは戸惑いを隠しきれずつい目を背けてしまう。

なぜこんなことになってしまったのだろう。

今日も、いつも通りの一日のはずだった。学校を終えたその足で図書館へ向かい、借りていた本の返却と新たに数冊の貸し出しを受けた後、魔導工学の研究所で研究員のアルバイト。

プレシアにとってはごくごく平凡な、特に記憶に残ることもないごくありふれた日のはずであったのに、研究所の入り口で自分を出迎えたその少女——リンディによって、その日はプレシアにとって長く忘れることの出来ない日となった。

「えーと、リンディさん、だったかしら」

「はい、プレシアさん！」

「研究所の見学に来た、ということでもいいのよね」

「はい！ 私魔導工学にすごく興味があるんです！ それで頼み込んだら、プレシアさんに案内してもらおうように言われて待っていました！」

瞳を輝かせるリンディに、プレシアは頭を抱えなくなる

のをなんとかこらえながら、

「所長……私におしつけたわね」

と小声で悪態をついた。

研究所には、これまでも何度となく見学者が訪れたことはあった。

ただ、魔力構築理論の応用による社会エネルギーシステムの開発、などという世間的にはほとんど知られていない研究内容に加え、魔法理論とエネルギー学への造詣がある程度深い人間でなければ行われている実験などの説明を受けてもなかなか理解しがたいということもあり、見学に来るといえばその方面について自身何らかの研究を行っている学生か、公共機関からの融資を受けて社会的なインフラの構築などを行っている企業の管理職など、きわめて特殊な立場の人々であることがほとんどであり、ましてリンディのような幼い子供が来たことなどこれまでに一度として無かった。

「リンディさん、いまいくつ？」

「歳ですか？ このまえ十歳になりました」

その返答にプレシアは軽いめまいを覚えた。

たしかにこの広い次元世界では幼くして優秀な成績を収め、場合によっては時空管理局などで将来のエリートとして育成されている子供もいる。

だがそれは本当にごくまれな話であり、一般的に十歳と

言えば学校に通い、まだ学問の基礎の基礎を身につけていくという段階だ。

「その歳で、魔導工学に興味があるの？」

「はい！ えっと、私も少し魔法を使えるんですけど、それをもっといろんなことに使えたらいいなと思っていて、図書館でいろいろと調べているうちに」

「魔導工学に行き着いた？」

「そうです！ それで近くに研究所があることを知って、一度見てみたくなって」

ということはこの近所に住んでいるのか、などと会話の内容とはあまり関係のないことを考えながら、プレシアはリンディを見つめた。

たしかに、幼いながらも言うことはしっかりしている。こんなことで嘘をつく意味もないだろうから、色々と調べているうちにこの学問に惹かれたという言葉も本当なのだろう。

ふむ、とプレシアは小さくうなずいた。

子供の面倒など見たことはないが、この子であれば多少は話を通じられるかもしれない。

説明などはかなり噛み砕いてする必要があるだろうが、それでもし将来の研究仲間が増えるきっかけになるとするなら、プレシアにとっても悪いことではなかった。

それに、とプレシアは思う。

考えてみれば、自分が十歳のときも、世間一般の子供とは既にかき離れていたな、と。

プレシアは、本人にとっては不本意なことに、周囲から天才と呼ばれていた。

特に魔導工学の研究分野においては幼いころからその才能を認められ、現在、十五歳にして既に多数の論文を発表し、また理論だけでなく実用化を前提とした実践的な研究を数多く行ってきたため、この方面の技術開発を行っている各種企業からも、プレシアの卒業後の進路について一年以上前からスカウト達が彼女の元を訪れていた。

だが、プレシア本人はそんな自身の評価に不満を感じていた。評価のレベルが低いということではなく、評価を受けること自体、プレシアにはどうでもいいことだった。

プレシアにとって研究は言わば個人的な趣味の延長であり、新たな魔導法則の発見や画期的な技術革新といったお題目にはまるで興味がなかった。

まして、世界平和のため、などと頭の片隅にすら思い浮かべたことなどない。

それだけに、時空管理局の人間と名乗る人物が自分の前に現われたときは、プレシアは驚きよりもまず戸惑いを隠せなかった。

いったい、なぜ自分のところに？

その人物が言うには、プレシアは魔導工学の研究者としても素晴らしいが、その魔力資質自体にも目を見張るものがあるという。

実際、研究にあたりプレシアは自身の持つ魔法の力を使つての実験も繰り返しており、それを利用した研究発表も何度か行つていた。それが、管理局の人間の目に止まつたという。

「あなたの力を、次元世界の平和と秩序のために役立ててみませんか」

そんな、まるで募集広告のキャッチコピーのような陳腐な言葉を面と向かつて言われ、プレシアはどう反応してよいかわからずただ苦笑するしかなかった。

管理局はこういった魔導方面の研究にも出資しており、実際プレシアが働いている研究所でもそれに少なからず助けられていることもあつて、スポンサーの言うことだから、と義理で適性検査のようなものを受けさせられた。

その結果、プレシアにはSSランク級の魔力資質が備わっており、管理局に入れば将来のエース候補になるとして、やや強引とも言えるスカウトを受けることになってしまった。

だがプレシアは、考えさせて欲しい、の一点張りでその誘いを頑なに固辞した。

どうしても、自分が世界の平和だとか秩序だとかのため

に働くという姿が思い浮かべられなかったのだ。

それを受けて一度は引き下がったかのように見えた管理局だったが、それでも未だに月に一度は連絡をとつてくるところをみるとあきらめたわけではないようで、それがまたプレシアにはうつつとうしく感じられ、悩みの種ともなつていた。

実際仕方が無いことだとはプレシアも思つていた。それだけの素質を持つ逸材ということは、逆にそれが敵対する存在となつた場合に非常に危険な存在となつてしまうことは明白で、おそらく自分は監視の対象としても扱われているのだろうと。

自分はただ、好きなことをしていただけないのに。

時空管理局と敵対するなど、プレシアには考えられないことだった。

研究の邪魔でもしてくるのであれば何らかの対策を講じなければならぬが、少なくとも今のところ彼らは自分たちの研究に対して積極的に支援してくれている。

できれば、このままお金だけ出して欲しい、というのがプレシアの本音だった。

しかし、どうやらそういうわけにもいかないようで、しかもそれがプレシア自身の研究成果が原因ということもあり、特に将来の進路選択が間近に迫ってきたこと二、三ヶ月は周囲の雑音にかき回され、当人にとっては極めて不本

意な日々を送らざるを得なかった。

「進路……進む路、か……」

学校の卒業まであと数ヶ月となったプレシアにとって、それは嫌が応にも無視することの出来ない問題だった。

進学、誘いのある企業への就職、それに、時空管理局。

当初考えもしなかった未来への選択肢を、プレシアはただわすらわしいもの、としか考えられなかった。

それを忘れられるのは研究に没頭しているときだけであり、プレシアにとっていまや唯一の心安らぐ時間であったのだが。

「プレシアさん、でもその前提だと、こちらの計測結果にブレが出ませんか？」

「そういうわけでもないのよ、それはね」

いま自分の横で実験結果をまとめたレポートのデータを熱心に見つめている少女、リンディとの会話に、プレシアは歓喜からくる一種の興奮を覚えていた。

打てば響くような、とはこういうことを言うのだろうか。リンディは、その年齢からは想像もつかないほどに聡明で、プレシアの説明を一つ聞くだけで十のこと、二十のことを吸収していく。

ときおり返ってくる質問はそのどれもが的確で、ときにはプレシアでさえ一瞬回答に詰まってしまうほどに、リンディの理解は早く正確だった。

気付けば、プレシアは普段研究所の所員にすらほとんど語ることはない、自身の魔導工学に関する理論とその実践への展望について、夢中でリンディに語って聞かせていた。「……あ、ごめんなさい、私ばかり一方的に話してしまつて」「いえ……いえ、とんでもないです！ プレシアさんのお話、本当にすごくて……もっと、もっと聞かせてください！」

結局その日、プレシアは日が落ちて研究所の閉所時間になるまでをリンディと共に過ごし、

「あの、また来てもいいでしょうか……？」

「ええ、いつでも大歓迎よ」

と、当初会ったときからは自身想像もつかないほど、リンディに対してまるで同じ学問を志す仲間のような感情を覚えていた。

「ありがとうございます！」

元氣よく頭を下げて、小走りに研究所の門から出て行くリンディの姿を見えなくなるまで見送って、それからプレシアは大きく溜息をついた。

「……まさか、あんな子に出会えるなんて」

それは、ここ最近の気が滅入るような日々の中に差し込んだ一筋の光明のように、プレシアには思えたのだった。